様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １８ 日現在

機関番号：１０１０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２２５９

研究課題名（和文）抵抗か、順応か？――ナチスの芸術政策と「若きラインラント」

研究課題名（英文）Resist or Adapt? - Das Junge Rheinland and Nazi Art Policy

研究代表者
野田　由美意（Noda, Yubii）

北見工業大学・工学部・教授

研究者番号：００５３７０７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：「ナチスの美術政策」の問題を、1919年にデュッセルドルフで結成された前衛芸術家グループ「若きラインラント」の芸術家たちの活動、展覧会をめぐる問題、芸術家とコレクターとの関係から、具体的かつ多角的に考察した。つまり、①ナチスに抵抗した画家オットー・パンコックの木炭画連作《受難》の制作の背景、②ドイツ共産党員の立場からナチスに抵抗した画家カール・シュヴェーズィヒの線描画連作《シュレーゲル地下牢》の制作の背景、③「若きラインラント」の一見順応、あるいは進んで迎合した芸術家たちが、ナチス主催の展覧会に参加した背景、④「若きラインラント」の芸術家たちと個人コレクターの関係を分析し、研究発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「若きラインラント」はヴァイマル共和国時代における前衛芸術運動の重要な一拠点となったにもかかわらず、日本ではほとんど知られていない。本研究ではその美術史的評価を試みたと同時に、闇に埋もれてしまいがちなナチス時代の「若きラインラント」の芸術家たちの活動に焦点を当てることにより、ドイツ近現代美術史の新しい側面を明らかにした。また、ナチスの美術政策の問題が具体的に芸術家、展覧会主催者、個人コレクターそれぞれの視点から多角的に解明されたと同時に、「若きラインラント」メンバーの作品分析を通じて、芸術と政治・社会の関係、芸術のもつ批判的な力、芸術はなぜ必要なのかということが、改めて浮き彫りになった。

研究成果の概要（英文）：In this research, while clarifying the historical significance of the avant-garde artist group Das Junge Rheinland, I also investigated the artists' activities and whether the artists chose to resist or adapt to the Nazi art policy. The issue of Nazi art policy was examined concretely and multilaterally from the Das Junge Rheinland artists' activities and issues involving their exhibitions. I analyzed, made presentations, and published papers on the following subject areas: 1) the background of the production of Passion by Pankok, who resisted the Nazis. 2) the background of the production of Schlegelkeller by Schwesig, who resisted the Nazis. 3) the background of the willing or unwilling participation of the artists in the Nazi Era exhibitions. 4) the relationships between Das Junge Rheinland artists and individual collectors. Through the analysis of their works, I examined the relationship between art and politics/society, the critical power of art, and the necessity of art.

研究分野：ドイツ語圏の近現代美術史

キーワード：若きラインラント　ナチス時代のアートシーン　デュッセルドルフ　ナチス時代の展覧会　ナチス時代のコレクター　芸術と政治・社会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1919 年、ヴァイマル共和国時代のデュッセルドルフで誕生した前衛芸術家のグループ「若きラインラント（Das Junge Rheinland）がこの時代の前衛芸術運動の重要な一拠点となったことは、日本ではほとんど知られていない。この事実を踏まえて、2015 年度鹿島美術財団「美術に関する調査研究」助成を受け、(1)「若きラインラント」の美術史的評価と位置づけと、(2）このグループに所属した画家、オットー・パンコック、カール・シュヴェーズィヒ（両者はナチスに抵抗した画家)、カール・ラウターバッハ（ナチスに一見順応した画家）のナチス時代における作品と芸術活動の検証に関する研究調査を行った。

この研究を発展させて、本研究では上記画家たちのナチス時代の作品や芸術活動を、さらにその周辺の芸術家たちのそれらと比較しつつ深く追究しようと考えた。また展覧会主催者や個人コレクターという、相反する立場の受容者とのかかわりから彼らの芸術の特徴や意義を考察することを目指した。

２．研究の目的

「ナチスの美術政策」の問題を、(1)「若きラインラント」の画家たちの活動、(2)展覧会をめぐる問題、(3)画家とコレクターとの関係から、具体的かつ多角的に考察することを目的とした。また作品分析を通じて、芸術と政治・社会の関係、芸術のもつ批判的な力、芸術はなぜ必要なのかということを浮き彫りにし、ドイツ近現代美術史の新しい側面を明らかにした。

３．研究の方法

「若きラインラント」の芸術家たちを中心に、「ナチスの美術政策」の問題を、画家たちの活動、展覧会をめぐる問題、画家とコレクターとの関係から、具体的かつ多角的に考察した。

そのために、次の項目について研究を行った：(1)パンコックの木炭画連作《受難》：制作の背景、(2)シュヴェーズィヒの線描画連作《シュレーゲル地下牢》：制作の背景、(3)「若きラインラント」とナチス時代のデュッセルドルフにおける展覧会、(4)「若きラインラント」の画家たちと個人コレクター

これらにかかわる一次文献と二次文献、ならびに作品をデュッセルドルフ市立博物館、デュッセルドルフ宮殿美術館など、デュッセルドルフを中心としたラインラント地方の各美術館、各図書館等で調査し、研究成果を学会や国際シンポジウム等で発表した。

４．研究成果

(1) 「オットー・パンコックの木炭画連作《受難》――制作の背景――」パンコックはナチスの人種差別政策に抗して、その対象となったジンティをモデルに《受難》のシリーズを制作し、1933 年の展覧会に発表しようとしたことから、芸術活動の禁止を命じられた。従来のパンコックとジンティに関する研究では、いわばパンコック「神話」――パンコックの作品発表に際する英雄的行為やジンティとの交流の経緯が主に注目される傾向にあり、作品自体の分析が不十分とみなされる。本研究では、作品と一次文献を最も所蔵するヴェーゼルのオットー・パンコック美術館を中心に、関連の作品と資料を精査した。とりわけパンコックが日本美術など非ヨーロッパの美術に関心を持っていたことも考慮しつつ、彼がなぜジンティにモデルとして興味を持ち、また彼らをいかに描き――戯画的にまで誇張、単純化され、しかも力強い人物像――、《受難》を通じて何を表現したかったのかを考察した。《受難》の分析に当たっては、パンコックのナチス時代から戦後にかけて造られた多くのジンティ肖像画も比較の対象として参照した。結論として、①パンコックはこれらの作品を通じて、目の前で起きている現実にドイツ国民を直面させようとしたこと、②また《受難》においてジンティは、迫害される側だけではなく迫害する側の人間と

しても描かれることから、ジンティもまたドイツ人と等しく弱さや愚かさを持った「人間」であることが導き出された。パンコックは連作《受難》を通じて、「人間」そのものを表現しようとしたと考えられる。

(2)「カール・シュヴェーズィヒ線描画連作《シュレーゲル地下牢》――制作の背景と作品の受容史について――」カール・シュヴェーズィヒは第一に 1920 年代、「若きラインラント」で活躍した画家である。共産党員となった彼は、1933 年ナチス突撃隊に逮捕され、凄惨な拷問を受ける。本稿では、釈放後、1935 年から 1936 年にかけて、その体験を線描画にした連作《シュレーゲル地下牢》(Schlegelkeller）を取り上げ、考察の中心とした。この苦境を生き延びて迎えた戦後、彼の作品は省みられることなく、その再評価と資料の発掘はやっと 1980 年代に始まる。また日本では、シュヴェーズィヒの作品や芸術活動についての集中的な研究は行われていない。今日に至るシュヴェーズィヒの研究では、彼の遺した手記に基づいてナチス時代の活動の経緯を追究することに主眼が置かれ、作品自体の分析がいまだ不十分といえる。そのため本研究は、連作《シュレーゲル地下牢》の構成や制作の背景を考察した。その際、戦時下の人間の肉体的・精神的苦痛や絶望の状況を描いた画家として、フランシスコ・デ・ゴヤや、オットー・ディックス、「若きラインラント」のメンバーで同じくドイツ共産党に所属し、収容所で死亡したペーター・ルートヴィヒスなどの作品も比較の対象とし、このような悲劇的な出来事の記録・告発としての絵画の意義を追究した。またシュヴェーズィヒの作品の受容史を考察することにより、このような作品をとらえることの今日的な意義を考察した。

(3)「「若きラインラント」の芸術家たちとナチス時代のデュッセルドルフにおける展覧会」ナチス時代、ナチス主催のデュッセルドルフで行われた展覧会、特に「デュッセルドルフ大芸術展 1937」のカタログ等の調査を通じて、展覧会主催者はナチスが芸術に求めたことを実際的にいかに展覧会に反映させたのかを考察した。またそこにやむを得ず、あるいは進んで出品した「若きラインラント」芸術家たち――ヴィル・キュッパー、リヒャルト・シュヴァルツコプフ等の、展覧会参加の背景を調査した。直接的な抵抗だけではなく、キュッパーのように、絵画を通じて分かる人にだけ分かる隠されたメッセージを送ろうとする行為からも、芸術の批判的な力が問われ得る。抵抗と迎合の間の中間地帯は実に多様であり、本研究では公然と抵抗した画家だけではなく、特にこの中間地帯にいた画家の活動を同時に見ることによってこの時代のアートシーンを明らかにした。なお、本研究については、公益財団法人ポーラ美術振興財団の助成により 2018 年 9 月 22 日慶應義塾大学三田キャンパス、9 月 25 日北見工業大学で開催された国際シンポジウム「ラインラントの美術 1900-1960」で口頭発表し、その論集に収められた。

(4)「ナチス時代における「若きラインラント」の作品の蒐集について」ナチス時代に「若きラインラント」の芸術家たちの作品がいかに蒐集されたのかに焦点を当てた。1937 年のナチスによる前衛芸術作品の押収とそれらをさらしものにした「退廃芸術展」以降、前衛芸術に対する取り締まりは一層厳しいものとなった。しかし「蒐集」という点から観ると、少なくともそれ以前は、ナチスの監視はあまり徹底したものではなかったこと、またそれ以後も、厳しい状況下こその「蒐集」の抜け道があり得たことを、本研究ではいくつかの例を挙げて示した。この場合、まずは芸術家の立場を中心として「蒐集」の実態を考えるべく、ナチスにより芸術家としての職業禁止令を受けたオットー・パンコックや、その仲間でありつつも、ナチスにやむを得ず順応したカール・ラウターバッハの状況を考察した。次に、個人コレクターの立場から「蒐集」の状況を観るために、ケルンの弁護士で近代美術のコレクターであるヨーゼフ・ハウブリッヒを例に挙げた。ハウブリッヒは「若きラインラント」関係の芸術家の作品を積極的に購入した代表的なコレクターの一人である。彼のナチス時代における「若きラインラント」関係の作品蒐集から、芸術

家本人のみならず、限定的ではありながら、デュッセルドルフのフェーメル画廊などいくつかの画廊から前衛芸術の購入が可能であったことを明らかにした。これらの分析から、ナチス時代に前衛美術が「蒐集」を通じていかに生き延び得たのかが判明した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Yubii Noda	４．巻 0
２．論文標題 Die Kuenstler des "Jungen Rheinlands" und die Ausstellungen in Duesseldorf waehrend der NS-Zeit	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Sammelband "Die Kunst im Rheinland 1900-1960"	６．最初と最後の頁 73-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野田由美意	４．巻 24
２．論文標題 オットー・パンコックの木炭画連作《受難》――制作の背景――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『成城美学美術史』	６．最初と最後の頁 75-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野田由美意	４．巻 14
２．論文標題 カール・シュヴェーズィヒ線描画連作《シュレーゲル地下牢》 ――制作の背景と作品の受容史について――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『人間科學研究』	６．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野田由美意	４．巻 33号別冊
２．論文標題 ナチス時代における「若きラインラント」の画家たちの芸術活動について	５．発行年 2016年
３．雑誌名 『鹿島美術研究』　（鹿島美術財団の「美術に関する調査研究の助成」申請の際に審査を受けた結果、鹿島美術財団からも助成金をいただいて研究した）	６．最初と最後の頁 77-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野田由美意	4．巻 0
2．論文標題 「若きラインラント」の芸術家たちとナチス時代のデュッセルドルフにおける展覧会	5．発行年 2019年
3．雑誌名 論集『ラインラントの美術 1900-1960』	6．最初と最後の頁 26-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野田由美意	4．巻 26
2．論文標題 ナチス時代における「若きラインラント」の作品の蒐集について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『成城美学美術史』	6．最初と最後の頁 61-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 野田由美意
2．発表標題 「若きラインラント」の芸術家たちとナチス時代のデュッセルドルフにおける展覧会
3．学会等名 国際シンポジウム「ラインラントの美術 1900-1960」（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 野田由美意
2．発表標題 オットー・パンコックの木炭画連作《受難》――制作の背景――
3．学会等名 成城美学美術史学会
4．発表年 2017年

１．発表者名 Yubii Noda
２．発表標題 Die Kuenstler des "Jungen Rheinlands" waehrend der NS-Zeit
３．学会等名 Tagung "Das Junge Rheinland. Gegruendet, Gescheitert, Vergessen?", Institut fuer Kunstgeschichte, Heinrich-Heine-Universitaet Duesseldorf（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 野田由美意
２．発表標題 ナチス時代における「若きラインラント」の作品の蒐集について
３．学会等名 成城美学美術史学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考